



園だより 1 月

起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り 主の栄光はあなたの上に輝く。

イザヤ書 60 章 1 節

「えがおあふれる いちねんになりますように」

今年も穏やかに新年を迎えられましたこと感謝いたします。

今日から3学期が始まりました。一年間でもっとも豊かに子どもたちの想いが溢れ、心と体が動く、最も充実した毎日を過ごす学期です。子どもたちの想いを見落とす事無く受け止め、共に感じて過ごして行きたいと願います。

一人ひとりのありのままを受け止め共に過ごす日々。そこには「～でなければ」「～しなければ」「～であるべき」の観点はありません。まず心が動きやってみたくと思ったとき、その思いを素直に表現してみる。そこから様々な広がりが為されます。それは思い描いた通りの展開かもしれないし、もしかしたら想像とは全然違い納得のいかない展開になっているかもしれない。ただ、そのどちらにしてもそのときの感性で感じたことは次への広がり、深まりに繋がっていくのです。その感じたことをどのように捉えるかによりますが、もし思い描いた通りの展開を良しとし、そうでなかった展開は良くないという、評価の観点から捉えると、それはとっても残念なことになると思います。もし、周りの環境（人的環境も含め）の中でそのときの一人ひとりを評価するという観点を持たずに共に過ごしたなら、子どもたちは評価で自己を捉えることなく、そのときそのときの状況を感じたままにその子らしく受け止め、そこで感じた喜びであったり、思うようにいかない葛藤であったり、悲しかったり、憤りであったりと、様々な気持ちを表現することでしょう。そのどのような表現も、その子の今の心もちです。その一人ひとりのその心もちを受け止めること、それがありのままを受け止めることなのだと考えます。そして、喜んでいるときには共に喜び、悲しんでいるとき、葛藤を感じているとき、憤りを感じているときなどは、その心もちをそのままに受け止め寄り添うことで、子どもたちは自ら次への展開に心も体も動き出します。

「自ら育つ可能性をもったその種が芽生え、大きく成長できるように、私たちは水をあげ、肥料を与えて、育つ土壌を豊饒なものにしていくのだ」これは元お茶の水大学教授 津守 真先生（1926－2018）が保育者に向けて話されたお言葉です。このお言葉は保育者たちへだけでなく、子どもたちを取り巻く人的環境になりうる全ての者たちへのお言葉ではないでしょうか。

冬休み、改めてこどもたちに寄り添い共に過ごすということを考える良いときが持てました。揺らぐことなく子どもたちの主体性を大切に、子どもたちのその溢れる想い、動く心と体を十分に受け止めつつ、今年度の成長の姿を喜び過ごす3学期を送りたいと願います。共に宜しくお願い申し上げます。



園長 駿河 幸子

